

## 「教区司祭の話」——2つの傷

吉 田 和 男

「教区司祭の話」には破綻が見られる。不安定さをもたらす傷といってもよい。この破綻に注目して、当該作品の評価について再検討を試みるのが、本稿の目的である。

ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, c.1340–1400) の『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales* あるいは *The Tales of Canterbury*) は物語集の体裁をとっている。そのおしまいに配置されたのが、田舎から出てきた教区司祭が物語る話である。この話の前に短いプロローグがついていて、そこで同行の巡礼一同を代表する宿屋の亭主に、何かおもしろい話をするように促された教区司祭は、それでは「楽しいお話を散文でお話しいたしましょう」(“I wol yow telle a myrie tale in prose” X(I), 46)<sup>1)</sup>と受ける。ところが実際に教区司祭が提供するのとはとても「話」と呼べるものではないのである。『カンタベリ物語』を構成する物語のなかでいちばんよく読まれるのは、これも「話」とは呼べない「総序」であろう。この物語集全体のイントロダクションは弱強5歩格858行、約7,000語を費やして書かれている。また「粉屋の話」はたいへんに楽しいファブリオ(艶笑小話)の傑作で、同じく弱強5歩格746行、約6,000語が使われている。例外はあるが『カンタベリ物語』は1,000行を越えない程度の長さが目安で、書かれているといえる。口承文学の時代には、芝居がそうであるように、ある一定の時間が作品の長さに制約を与えるのだ。「教区司祭の話」はこれらの作品と違って散文で書かれているので、行数の比較は意味を持たないが、行数1,006、約33,000語を用いて書かれている。非常に長い作品なのである。ここから「教区司祭の話」は聴衆を前にして読まれることを前提にしては書かれていない、といえるだろう。

このたいへんに長い「教区司祭の話」の骨格をまずみてみよう。

主題：天の都への道<sup>2)</sup>

正しい道は悔悛の秘跡による

- (1) 悔悛の3つの行為
- (2) 悔悛の3つの種類
- (3) 完全な悔悛に必要な3つのもの
  - (i) 心による痛悔
  - (ii) ことばによる告白
  - (iii) 罪の償い
- (I) 痛悔、その6つの原因
  - (1) 罪を思い起こすこと

- (2) 罪を軽蔑すること
- (3) 最後の審判を恐れること
- (4) 善行をし損なったことを後悔すること
- (5) 十字架のキリストを思い出すこと
- (6) 3つの希望
  - (i) 罪の許し
  - (ii) 恩寵の到来
  - (iii) 天国の栄光

## (II) 告白

- (1) 司祭に罪を残らずに示す
- (2) 罪を理解する
  - (i) 罪はどこからやってくるか
    - (a) 悪魔の入れ知恵
    - (b) 肉の快楽
    - (c) 理性の同意
  - (ii) 罪はどのようにして大きくなるか
    - (a) 情欲が育てる
    - (b) 悪魔が煽る
    - (c) 意志が選択する

罪とは何か

[ここで告白の項中断]<sup>3)</sup>

罪：2種類の罪

- (1) 小罪
- (2) 大罪
- (1) 傲慢

その種類

- (ア) 傲慢の生み出すもの：不従順，自慢，偽善，嘲り，横柄，破廉恥，軽蔑，短気，反抗，不和，無礼，不敬，強情，慢心，うわさ話
- (イ) 傲慢の種類
  - (i) 精神の傲慢
  - (ii) 肉体の傲慢
- (ウ) 傲慢の源泉
  - (i) 生得の善きもの
    - (a) 肉体的：健康，精力，器用，美しさ，高貴な生まれ，自由
    - (b) 精神的：才知，知性，理解力，判断力，記憶力

(ii) 運命が与える善きもの

(a) 富, 昇進, 名声

(iii) 恩寵による善きもの

(a) 知識, 忍耐力, 温情, 熟考, 誘惑に対する抵抗力

傲慢の罪の治療法——謙遜

(i) 心における 4 種類

(ii) 言葉における 4 種類

(iii) 行為における 4 種類

(2) ねたみ

その種類

(ア) 他人の美点や繁栄をくやしがる

(イ) 他人の災難を喜ぶ：陰口の 5 つの下位区分。さらに(1)陰口は不平不満を引き起こし, (2)不平不満は心に悲痛をもたらし, (3)心の悲痛は不和をもたらし, (4)不和は隣人に対する嘲笑をもたらし, (5)嘲笑は非難をもたらし, (6)非難は悪意をもたらす

ねたみの罪の治療法——神を愛すること, そして隣人を自分と同じように愛すること。特に敵を愛することが強調される

(3) 怒り

その種類

(ア) 邪惡に対してむけられるよい怒り

(イ) わるい怒り

(i) 性急で無思慮なもの

(ii) 冷たくて計算ずくのもの：傲慢に発し, 怨恨に育まれ, さらにねたみ, 不和の加勢を受ける

(ウ) 怒りから生じるもの：嫌悪, 仲違い, 戦争, 殺人 (精神的および肉体的), 神の非難, 激怒, いいわけ, 瀆神, 罵り, 嘘, へつらい, 冒瀆, 小言, 叱責, 二枚舌, 裏切り, 脅迫, 無駄話, おどけ, ふざけ, 怒りの罪の治療法——柔和, 忍耐

(4) 不精

その種類：労働を嫌うこと, 自暴自棄, 惰眠, 不謹慎, 怠慢, 懶惰, 遅刻, 怠惰, 貧困と破滅, 冷酷さ, 信仰心の欠如, 現世的悲嘆

不精の罪の治療法——不屈の精神, 勇気, 信心, 希望, 自信, 寛大さ, 節操

(5) 貪欲

定義：自分の所有していないものを所有したいという欲望, また, 自分の所有するものを所有し続けたいという欲望

(ア) 現世的：富の分配は善, 詐欺, 裏切り, ペテンによる商売

(イ) 精神的：聖物，聖職の売買が博打，叱責，窃盗，瀆神，嫌悪，浪費，人殺し，神聖冒瀆

(ウ) 傲慢はまた，虚言，泥棒，嘘の証言，偽りの誓言を生む

貪欲の罪の治療法——慈悲と哀れみ，そして理にかなった気前の良さ（ただし愚かしい浪費にあらず）

## (6) 貪食

その種類

(ア) 大酒

(イ) 思慮分別の喪失

(ウ) 下劣な食事作法

(エ) 食いすぎ，飲み過ぎからくる病気

(オ) 酔っぱらって記憶を失うこと

聖グレゴリーによる貪食の5つの種類の分析

貪食の罪の治療法——節制，控えめ，羞恥心，中庸，適度，節酒，禁酒

## (7) 好色

その種類

(ア) 姦通：行為のみならず欲望だけでも罰せられる

(イ) 密通

(ウ) 処女を誘惑すること

(エ) 売春：信仰の放棄，盗み，不潔，私生児，近親相姦，売春行為およびポン引き行為

(オ) 性欲（夫婦の性行為における快楽も含まれる）

(カ) 性的倒錯

(キ) 手淫

好色の罪の治療法——貞節と禁欲

(ア) 結婚生活において：結婚の本質。妻の夫に対する従順について

(イ) 寡婦の場合：男の抱擁を避け，キリストの抱擁を求めるべし

(ウ) 処女の場合：清浄な心と純潔のからだを求めるべし。誘惑の機会を避けよ

## [告白のつづき再開]<sup>3)</sup>

自分の罪を考えること。7つの環境が挙げられる。ほんとうの告白には4つの条件があること

(1) 心の中で悲嘆にくれて悔やむ。その5つのしるし

(i) 恥ずかしいという感情

(ii) 謙遜の気持ちをもつての告白

(iii) 涙

- (iv) 恥ずかしからといって、ためらわないこと
- (v) 与えられた悔悛の秘跡に従うこと
- (2) 速やかになされなければならない
- (3) 自由な意志でなされなければならない
- (4) 決まりに従ってなされなければならない

### (III) 罪の償い——慈善行為と肉体的苦行による

- (1) 慈善行為
  - (i) 心の中での痛悔
  - (ii) 隣人の短所欠点を哀れむ
  - (iii) よい助言と励まし（精神的および物質的）。これは自分の蓄えから、速やかかつ密かになされるべきである。
- (2) 肉体的苦行
  - (i) 祈り
  - (ii) 徹夜の祈り
  - (iii) 断食：以下のものを絶つべし
    - (a) 肉と酒
    - (b) 現世的娯楽
    - (c) 7つの大罪源
  - (iv) 毛のシャツを着る、自分を鞭で打つなどの苦行

### 悔悛の秘跡を邪魔する4つのもの

- (1) 不安
- (2) 恥ずかしさ
- (3) 期待
- (4) 絶望

注3)、3')に2カ所の傷を認めることができる。それは悔悛の秘跡のプロセスを順次示していく途中に、7つの大罪源の項をむりやりはめ込んだことによって生じたものだ。「教区司祭の話」はこの話が属する系譜の他のものたちと多くの共通点を持つが、その構造は他と比べて異質と言わざるを得ない。同種のものが持つ安定を欠いているのである。

「教区司祭の話」は『悪徳美徳大全』<sup>4)</sup>と同じ系譜に属する。それは13世紀以降ヨーロッパ各地で盛んに書かれ、読まれた悔悛の秘跡について詳述する解説書なのである。ここで中世の宗教学の展開について、簡単にふれておきたい。

1215年、ローマのラテラノ宮殿で第4回ラテラノ公会議が行われた。イノケンチウス3世の治世の最後を飾る中世最大の公会議であり、中世のキリスト教世界に最も大きな影響を与えたといわれる。13世紀といえば、キリスト教会内部で改革が熱心に行われた時代である。こ

の第4回ラテラノ公会議でも、キリスト教会が内部からの改革を推進して、キリスト教という宗教システムを確固たるものにする試みが精力的になされた。重要な教令がいくつも発布される。一例をあげれば、聖職者については、犬、鷹を使う狩りをしてはならない、処刑、決闘のたぐいを見物に出かけてはならない、新しい聖遺物は教皇の承認がない限りこれを拝んではならない、衣服は定められたもの以外を着用してはならない、等々とある。数ある教令の中で「教区司祭の話」に深い関係を持つのが“*Omnis utriusque sexus fidelis*”ではじまる第21条の教令である。信仰をもつものは男であれ女であれ、ものごとの判断ができる分別をもつ年頃に達したならば、少なくとも年に一回は自分の教区の司祭に、自分の犯した罪をひとつ残らず全部告白しなければならない。また少なくとも復活祭の日曜日には、聖体を拝領しなければならない。これを実行しない者は一生涯教会に立ち入ることは許されない。また死んでも埋葬は許されない、という内容を持つものだ。

*Omnis utriusque sexus fidelis, postquam ad annos discretionis pervenerit, omnia sua solus peccata confiteatur, fideliter, saltem semel in anno, proprio sacerdote, & in-junctam sibi poenitentiam studeat pro viribus adimplere, suscipiens reverenter ad minus in Pascha eucharistiæ sacramentum: nisi forte de consilio proprii sacerdotis, ob aliquam rationabilem causam ad tempus ab ejus perceptione duxerit abstinendum: alioquin & vivens ab ingressu ecclesiae arceatur, & moriens Christiana careat sepultura. Unde hoc salutare statutum frequenter in ecclesiis publicetur, ne quisquam ignorantiae cæcitate velamen excusationis assumat. Si quis autem alieno sacerdoti voluerit justa de causa sua confiteri peccata, licentiam prius postulet & obtineat proprio sacerdote, cum aliter ille ipse non possit solvere, vel ligare.<sup>5)</sup>*

この教令により、それまでは個々人が任意に行えばよかった告白が強制的なものとして義務づけられた点になによりも見逃せない。同時に、告白が公衆の面前で行われる従来の形から、告白場において聴罪司祭だけに向って行われ、聴罪司祭には秘密の厳守が義務づけられることになったことも重要である。この変化にともなってなにが起ったか。まず十分に教育、訓練を受けた聴罪司祭が大量に必要となる。そこでかれらを育成するために、特に悔峻の秘跡を中心にこと細かに書き記した解説書が書かれることになった。そしてこのような解説書は多くの司祭たちのトラの巻として、キリスト教世界に広まった。ラテン語の読めない聖職者もざらにいた時代ことゆえ、英語、フランス語などの母語で書かれることも珍しくはなかった。チョーサーの「教区司祭の話」は、まさにこの系譜に連なるものなのである。まとめると、13世紀以降、悔峻の秘跡が義務づけられたことにより、当然個々人の自罪意識が鋭く出てくることになる。これに対応して、悔峻の秘跡という宗教的システムを円滑に作動させるために、罪を犯した者たちを病人に例えるならば、その病気の正体は何であるかを明らかにし、さらにその治療を施す魂の医者としての教区司祭を育てる必要にキリスト教会は迫られたのである。解説書、

手引きの類が大量に書かれることになったのには、このような背景があった。

この種の解説書の特徴は網羅的、カタログ的、百科全書的であるということだ。大事なのは“a matter of *distinctiones* and *schemata*, of definitions and subdivisions, of almost mathematical precision”<sup>6)</sup>だった。悔悛の秘跡を受けようとする信者を前にした司祭は、彼らの魂の医者なのだ。患者は自分の症状を医者に告げる。医者はその症状の正体を正確につかまなければならない。そのために魂の病気を詳しく解説した参考書が役にたつ。解説書が大部で網羅的なものになるのは当然なのだ。「教区司祭の話」が長い所以である。またきわめて実用的なものであるから、そこに読んでおもしろいという要素は必要ない。むしろ、もし読む者をおもしろがらせるような要素が紛れ込めば、その全体的価値を損なうとすら考えられる。

たとえばすでに言及した『悪徳美德大全』では、(1)十戒についての解説、(2)7つの大罪源についての解説、(3)悔悛の秘跡の諸段階についての解説と記述はなめらかに進む。対して「教区司祭の話」ではすでに指摘したとおり、7つの大罪源の詳細にわたる解説をいわばむりやりこじ入れたために、不安定が生じている。罪の項目が告白の秘跡の解説の途中に割り込んでいるために、この長い記述を脱線だとする研究者も多い。作者はなぜ、この種の書き物としては美しくない構造を採用したのだろうか。なぜこのような無理をしたのだろうか。これを作者の意図的な工夫とすると、この工夫はなにを目的になされたのであろうか。すくなくともこれが「教区司祭の話」という宗教的解説書の担わされている目的をより効果的に果たすために寄与しているとは考えられない。事実上、与えられた形式をあえて破ったということだろう。なぜここで不安定を求めなければならなかったのだろうか。別の角度から「教区司祭の話」にみられる別の破綻の例にあたって、この問題の答えを探してみよう。

7つの大罪源について記述されるとき、傲慢の罪が先頭に置かれるのは聖グレゴリウス以来の伝統である。「教区司祭の話」も“De Superbia”からはじまる。その中の一節を引く。

As to the first synne, that is in superfluitee of clothynge, which that maketh it so deere to harm of the peple ;/nat oonly the cost of embrowdyng, the degise endentyng or barryng, owndyng, palyng, wyndyng or bendyng, and semblable wast of clooth in vanitee ;/but ther is also costlewe furryng in hir gownes, so much pownsonyng of chisels to maken holes, so much daggyng of sheres ;/forthwith the superfluitee in lengthe of the forseide gownes, trailyng in the dong and in the mire, on horse and eek on foote, as wel of man as of womman, that al thilke trailyng is verrailly as in effect wasted, consumed, thredbare, and roten with dong, rather than it is yeven to the povre, to greet damage of the forseide povre folk./And that in sondry wise ; this is to seyn that the moore that clooth is wasted, the moore moot it coste to the peple for the scarsnesse./And forther over, if so be that they wolde yeven swich pownsoned and dagged clothynge to the povre folk, it is nat convenient to were for hire estaat, ne suffisant to beete hire necessitee, to kepe hem fro the distemper-

ance of the firmament./Upon that oother side, to speken of the horrible disordinat scantnesse of clothyng, as been thise kuttet sloppes, or haynselyns, that thurgh hire shortnesse ne covere nat the shameful membres of man, to wikked entente./Allas, somme of hem shewen the boce of hir shap, and the horrible swollen membres, that semeth lik the maladie of hirnias, in the wrappyng of hir hoses ;/and eek the buttokes of hem faren as it were the hyndre part of a she-ape in the fulle of the moone./ And mooreover, the wrecched swollen membres that they shewe thurgh disgisyng, in departyng of hire hoses in whit and reed, semeth that half hir shameful privee membres weren flayne./And if so be that they departen hire hoses in othere colours, as is whit and blak, or whit and blew, or blak and reed, and so forth,/thanne semeth it, as by variaunce of colour, that half the partie of hire privee membres were corrupt by the fir of Seint Antony, or by cancre, or by oother swich meschaunce./Of the hyndre part of hir buttokes, it is ful horrible for to see. For certes, in that partie of hir body ther as they purgen hir stynkyng ordure,/that foule partie shewe they to the peple proudly in despit of honestitee, which honestitee that Jhesu Crist and his freendes observede to shewen in hir lyve./. . . I sey nat that honestitee in clothyng of man or womman is uncovenable, but certes the superfluitee or disordinat scantitee of clothyng is reprevable. (X[I] 416-431)

服装の過度の装いを教区司祭はここで激しい口調で攻撃する。長すぎるために引きずってしまい糞まみれになる服を着る男女を痛罵すると思えば、男の服があまりにも短いために、性器がまる出しになること、覆いはしているものの出っ張ったかたちをことさら強調する男がいると非難する。さらには悪臭を放つ尻を、その汚い部分を誇らしげに見せびらかす男をきびしく糾弾する。糞便と排泄と生殖器。チョーサーの全作品の中でも、これほどの異臭を放つ箇所はほかに見いだすことができない。“that is in superfluitee of clothyng” とこの項目のトピックをあげたとたん、テキストがゆがむのがみえる。しかもこの項目がおわると、司祭の口調はたんとした、つまりこの種の解説書に良く似合うトーンを取り戻すのである。

「教区司祭の話」には“dull”あるいは“drab”という形容詞が付けられることが多い。しかしこの汚らしい箇所こそがこの長く退屈な話をいきいきとしたものにするという視点を提示する主張もある<sup>7)</sup>。John Donne の火を吹くような説教を思い起こさせるという研究者もある<sup>8)</sup>。この部分だけを取り出して、評価を与えようとすれば、そのような評価はあり得るかもしれない。しかし少なくとも「教区司祭の話」という宗教的解説書のコンテキストからみれば、この糞便と排泄と生殖器の箇所は過剰といわざるを得ない。ここに述べられている対象物が必ずしも過剰とはいえない。おなじ『カンタベリ物語』の「召喚吏の話」にある尻の分配のエピソード、「バースの女房の話の前口上」で、これでもかこれでもか、と言及される女性生殖器。しかしこれらは臭わないのだ。話の小道具としてきちんと役割を果たしていて、自分の



置かれているテキストを乱したりはしない。衣服の華美について傲慢の罪の項でふれるのは伝統的である。しかしそこから性器を誇示するという好色の罪にまで入り込むのは、やはり過剰である。繰り返しになるが、ここでテキストはぐらっと揺れる。

説教用例話というものがある。説教とは聖書のある一節を、わかりやすく説明し、その教えに従うことを、信者たちに諭すものだ。聖職者たちは説教のなかにわかりやすいたとえ話を挿入して、説教の効果をあげようと工夫をこらすようになる。そのうち、このようなたとえ話が独立した読み物として編まれるようになった。人間は物語る動物である、という言い方があるが、教会からですら物語が生まれてくるのである。宗教文学の中に、すでに物語の芽が隠されていることは、説教用例話集が物語集の色彩を色濃くもつようになった歴史的展開をみれば納得せざるを得ない。宗教的解説書を書く、あるいは編む者（少ない例外を除けば聖職者、それも修道士であることが多かった）はこの芽をことさら育む、あるいは花が咲くのを許さない。しかし物語の誘惑にかれらが常に晒されていたということができよう。

「教区司祭の話」には2カ所、作全体からみて不安定を生み出す契機としての破綻、傷があることをみてきた。それらはいずれも、物語りたいという欲求に憑かれた、そして物語を作り上げる天賦の才をもった作者が、「教区司祭の話」に宗教的解説書の形式を選びとったがために、ただ整頓せよ、安定した実用的な記述に徹せよ、決して物語ってはならないという、宗教的解説書の書き手に要求される基本姿勢に自身を縛り付けながら、やはりその息苦しさから逃れるためにやむを得ず、まるで鯨が息をするために海面に浮かび上がるように、テキスト上に残した波紋なのではなかろうか。そのような作者の身ぶりがこれら2カ所の破綻の部分にみられるのである。

#### 注

- 1) *The Canterbury Tales* からの引用はすべて、Larry Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, Third Edition (Oxford University Press, 1987) からである。
- 2) Trevor Whittock, *A Reading of the Canterbury Tales* (Cambridge University Press, 1970) を参照のこと。
- 3), 3') [ ] によるト書きは筆者。
- 4) W. Nelson Francis (ed.), *The Book of Vices and Virtues*, EETS, OS 217 (Oxford University Press, 1942)
- 5) 英語訳。

All the faithful of both sexes, after they have reached the age of discretion, must confess all their sins at least once a year, to their own parish priest, and perform to the best of their abilities the penance imposed, reverently receiving the sacrament of the Eucharist at least on Easter Sunday, unless by chance he (the priest) should counsel their abstaining from its reception. Otherwise they shall be cut off from the Church during their lifetime and shall be without a Christian burial in death. Whereupon let this salutary statute frequently be made in public in churches, lest anyone may assume by blind ignorance a veil of excuse. However, if anyone with a just cause should wish to confess his sins to another parish priest, let him first seek and obtain permission from his own parish priest, since otherwise that one cannot loose or bind (the penitent)...

- (Mary Flowers Braswell, *The Medieval Sinner* [Associated University Presses, 1983], p. 26)
- 6) W. A. Pantin, *The English Church in the Fourteenth Century* (University of Toronto Press, 1980), pp. 189 f.
- 7) John Finlayson, "The Satiric Mode and the *Parson's Tale*", *Chaucer Review* 6 (1971), pp. 94–115. また Robert A. Pratt (ed.), *The Tales of Canterbury* (Houghton Mifflin, 1966), p. 490.
- 8) Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer: The Canterbury Tales* (Oxford University Press, 1989), p. 408.